

ミステリ読書案内

2023. 11. 20 発行元

第530号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

中・高校生にお薦めの本^{その26}

中学生、高校生にお薦めするミステリ本の紹介の26回目。第510号に引き続いて講談社から出版された『ミステリーランド』シリーズの中から4冊を選んでみた。「冒険もの」を中心に紹介してみよう。

「冒険もの」の面白さ

講談社の『ミステリーランド』シリーズを見渡すと、「少年探偵団」形式の小中学生を主人公にした作品が多いのに気付く。まあ、ジュヴェナイルとしては一番基本的な形と言えるだろう。ただ、そうなる、扱える事件は日常生活に繋がったものになってしまう。小振りな話に仕上がってしまうのは、ある意味しょうがないかな？と思う。

それに対して、今回取り上げた「冒険もの」傾向の作品は、日常の

枠を乗り越えてしまうので大きな展開が可能になる。小学生くらいだとミステリに求めるものはハラハラドキドキのサスペンス性だったりするので、「冒険もの、怪奇作品、幻想作品」の方がびったりなのかもしれない。コチコチの論理性を重視した安楽椅子探偵、本格謎解きなどが好きという小学生は少ないのではないだろうか。

そんな意味で今回取り上げた4作品は型破りの部分が入り込んであって面白い。大人が読んでも十分に楽しめるというものだ。

西澤保彦『いつかふたりは二匹』

2004年の第4回配本。主人公は小学六年生の菅野智己。単身赴任の父親が東京で骨折入院したので、義理の母親が付き添いに行っている。それで智己は大学生の義理の姉・久美子と二人で生活。でも不思議なことに智己は猫のジェニイに乗り移ることができるのだ。ジェニイになった時だけセントバーナード犬のピーターと会話することができるという設定。

小学生を車で連れ去ろうとする誘拐未遂事件が発生。誘拐されようになった女の子は姉の久美子が家庭教師をしようとしていた子だった。ジェニイに乗り移った智己は行動力を生かしてピーターとともに犯人を追い詰めていくことに…。最後にジェニイは…。

山口雅也『ステーションの奥の奥』

2006年の第11回配本。コチコチの「謎解き本格もの」かと思って読み始めたのだが、そんなことはなく、『キッド・ピストルズ』並みの型破りの方向に展開していくところが面白い。ユーモアたっぷり。

6年生の神野陽太は宿題の作文に「吸血鬼になりたい…」などと書いたので、先生から睨まれる羽目に。夏休みの自由研究の題材として「東京駅の建物の歴史」を選び、叔父の夜之介とともにステーションホテルに宿泊することになった。知り合いの駅員に案内を頼み、詳細を調べ始めたのは良かったのだが…。夜中に北口近くの旧自由通路に潜り込んでみると、その途中にある部屋の中で死体を発見してしまい…。

井上雅彦『夜の欧羅巴』

2011年の第17回配本。作者の井上雅彦の作品を読むのはこれが初めて。作家紹介を見るとホラー系、幻想系のミステリ作家のようだ。蒼月海里作品のように現世の淵に位置する「境界」の世界。

十二歳の宮島レイの物語。レイの母親は吸血鬼を描く画家ミラルカ。ある時母親は一冊の画集を残して行方不明になってしまう。「夜のヨーロッパ=欧羅巴へ行く…」と言って。レイの元へ刑事が三人訪ねてきて情報を得ようとする。何かしらの陰謀が蠢いているように感じられた。レイは不思議な少女ココと出会い、母を探すヨーロッパの国々への旅に出掛けるのだった。波乱万丈の展開が…。

田中芳樹『ラインの虜囚』

2005年の第7回配本。いかにも田中芳樹らしい作品。ヴィクトル・ユーゴーやアレクサンドル・デュマ、そしてコナン・ドイルの作品も飛び出す壮大な構成。時は十九世紀。ナポレオンがセントヘレナ島で死去した後の時期。

コリンヌという少女が主人公。コリンヌの父親はフランス貴族の出だが、祖父と考え方が合わずにカナダ移民となった。カナダで生まれたコリンヌは父親が死亡したため、フランスに渡り祖父に孫として認めてもらおうと考えた。祖父に会ったところ、難題を突きつけられた。ナポレオンが生き延びてライン川沿いの塔に幽閉されているという噂がある。その幽閉されている人物の正体を明らかにすることができたなら、孫と認めるといふのだ。コリンヌは一緒に行ってくれる仲間を集めライン川目指して出発する。付き添う仲間は三人。一人は…。もう一人は…。待ち受ける数多くの敵に四人はどう闘いを挑んでいくのか…。そして、旅の最後に塔にたどり着いた四人の前に姿を現すのは…。